

話題作『1868 明治が始まった年への旅』の著者

加来耕三氏に聞く「明治維新」(上)

平成30年(2018)は明治維新150年ということで、巷には維新関連情報があふれかえっている。その中で話題となっているのが、『1868 明治が始まった年への旅』(時事通信社)だ。新政府側、旧幕府側、庶民、外国人などの証言、動きを通じて1868年という激動の一年間を多面的、複合的に分析し、時代を描き切った力作である。著者の加来耕三氏に明治維新とは何だったのか、とことん語っていただいた。

(インタビュー・構成 ジャーナリスト 山田 稔)

—幕藩体制が崩壊し、明治新政府が登場する激動の時代の中で、あえて1868年という一年間に絞って描かれた狙いは、どこにあるのでしょうか。

加来 その年は「慶応4年」で始まり、7月17日(旧暦、以下同じ)に江戸が東京と改められました。「明治」に改元されたのは9月8日で、正月にさかのぼって明治と称されることになったのです。そして10月13日に天皇が京都から東京に到着し、東京城と名を変えた江戸城に入りました。慶応と明治、江戸と東京。一年の中に二つの時代が混在していたのです。その実態をつまびらかにすることで、明治維新の実相を読者に知っていただきたい、という思いで執筆しました。

—多くの日本人にとって1868年は、明治時代が始まった年という認識はありますが、その年に国内でどんなことが起きていたのか、庶民の暮らしぶりはどうだったのか、詳しく知る人は少ないと思います。この年に閏月があったことを知っている人は、ほんの一握りではないでしょうか。

加来 当時は太陰太陽暦でほぼ3年に一度、閏月がありました。1868年は4月の後に、閏4月が設けられています。こうした事実を知ること、歴史学の楽しみのひとつといえますね。歴史をステレオタイプでとらえると、本質が見えてきません。過去は未来を映す鏡です。1868年という一年間に起きたこと、トピックなどを通して、幕末から連綿と続く歴史の流れを、



読者にとらえていただきたいのです。

——実に多くの事象が盛り込まれています。執筆は大変だったのでは？

加来 昭和初期には1868年のことを鮮明に覚えている人が結構いました。「戊辰物語」「武江年表」など証言録が多く残っています。こうした文献にある生の声を織り込みながら、当時の様子をお伝えしようと試みました。

主人公は薩長でも徳川でもなく、慶応から明治へと移行する時代そのもの

——一般の歴史書というと、特定の人物を主人公にして描かれているものが多いのですが、本書にはこれといった主人公がいません。徳川慶喜（32歳）、西郷隆盛（42歳）、勝海舟（46歳）、明治天皇（17歳）など多数の人物が登場しますが、必ずしも主人公ではない。ここにも特色があります。

加来 鳥羽・伏見の戦いにしても、戦いの流れだけでなく、巻き込まれた人々がどう動いたのか、何を考えたのかにスポットをあてました。あるいは9月から10月にかけての、明治天皇の東京行幸は、岩倉具視（44歳）をはじめ随行員

が3300人という盛大な行列でした。これは政権が徳川幕府から天皇家をいただく新政府に変わったことを、庶民に知らしめるための一大演出で、ありとあらゆるデモンストレーションが繰り広げられました。ここでも記述の中心は天皇ではなく、新政府側の思惑、動き、そして天皇を歓迎する庶民の反応だったりするわけです。つまり、京都から東京に遷都する、慶応から明治へと移行する時代そのものが主人公といえるのでしょうか。

——明治維新を彩るさまざまな人物、徳川慶喜、西郷隆盛、大久保利通（39歳）、松平容保（34歳）など、歴史上の著名な人の動きや

思いが描かれています。それだけにとどまりません。庶民の暮らし、外国人の視点、当時の社会風俗、世相まで紹介されていて実に多面的、複合的な構成になっています。

加来 たとえば1868年の東京だけでなく、薩摩はどうだったのか、京都はどうだったのか、その時の庶民の暮らしはどうだったのかといった要素を盛り込んでいくことで、時代の空気感が伝わるように試みました。今の方たちは、江戸から明治になって庶民の生活も一変したと思いがちですが、実態は何も変わっていません。ちよんまげさえ落としていません（笑）。明治4年（1871）に「散髪脱刀令」が出され、明治6年に明治天皇も散髪を行い、ようやく官吏や町民も従うようになっていく。暮らしとこののはゆっくり、ゆっくりと変わってゆくのなのですね。

明治維新の表舞台に立つことなく世を去った人物にも照射

——歴史上でみると日の当たらなかった人物、権力者よりも知恵がありながら、生かされなかった人物も描かれています。勝海舟のライバルといわれた旧幕臣・小栗上野介忠順（42歳）や会津藩国家老の西郷頼母（39歳）らです。



『1868 明治が始まった年への旅』 (時事通信出版局)

定価：本体1,400円(税別)

明治150年。
慶応4年＝明治元年にタイムスリップ！
戦争、政治、暮らし、流行…。そして毎日の天気まで。
すべてを再現し、毎月1章。本文と下段の「副音声」で伝えます！

パリで日本語新聞発刊。「200年後」を描いたSF小説翻訳。
くじで決めた元号「明治」。
「東武皇帝」を戴く幻の「北部連邦政府」。
みんなこの年!!

1月1日。江戸は穏やかな晴天に恵まれました。
江戸城に主はいません。不況とインフレ。
それでも人々は初日の出を見るために高輪や愛宕山に向かいます。
激動の一年が始まりました。
明治天皇17歳、西郷隆盛42歳、徳川慶喜32歳。
そして多くの市民たち。
さあ！1868年への旅へ！

とりわけ小栗の記述には加来さんの思いが込められているように感じました。

加来 私の大学時代の卒論テーマは勝海舟でしたが、実は個人としては小栗が好きでしたし、評価していました。小栗はあばた面と名前（上野介）で損していますが（笑）。人物でいえば、

勝より以上に立派でした。鳥羽・伏見の戦いに敗れた後も、徳川慶喜に徹底抗戦を訴え、具体的な作戦を披露しています。後にこの作戦を知った明治の高官たちが、肝を冷やしたと言われるほどの作戦でした。小栗の才覚は横須賀製鉄所（のち横須賀造船所）の建設でもいかな

く発揮されました。本格的な産業革命の前提条件である鉄の大量供給、安価供給の必要性を、彼は誰よりも早くに理解していたからです。小栗は協力者の栗本鋤雲に「たとえ幕府が減び、そっくり鬘斗（のし）を付けて、新しい持主に渡すことになったとしても、なお土蔵付き売家という栄誉は残せる」と語っています。幕府がもう長くないことを理解していたのです。それでも日本の将来のために、製鉄所の建設に心血を注いだ

わけです。小栗は幕臣として傑出した人物でしたが、徳川家の存続しか頭にない慶喜に疎んじられ、お役罷免となってしまい、閏4月6日に新政府軍によって処刑されてしまいました。真実が見えていた人物の悲劇です。

——本書は慶応4年1月（正月）から明治元年12月まで13か月間の出来事、動きを日めくりにようにして紡いでいます。こうした構成にした理由は何でしょうか。

加来 学生時代から40年間、歴史学を研究していますが、私自身、日めくり形式で歴史を編集したのは初めてです。歴史学の世界が、いつしか「結果論で語られる」ようになってしまいました。知っている結末を、前提にしてしまうわけです。これだと新たな気づき、学びができません。日めくりにすることで、その時に当時の人々は明日以降の動きをどう考え、どう対処しようとしたのかが見えてきます。これは現代社会にも通用すること。みんな今日のことは分かりませんが、明日以降の具体的な展開は、誰もわかり

ません。いったん、立ち止まって考える。この習性が大切なのです。本書を手にとられた方が、カレンダー式の記述の中で、何かひとつでも新たな気づき、発見をされることを願ってやみません。

（後編につづく）



Profile

1958年、大阪市生まれ。歴史家・作家。奈良大学文学部史学科卒業。著作活動のほかに、テレビ・ラジオ番組の時代考証や監修を担当。「ザ・今夜はヒストリー」（TBS系）、「英雄たちの選択」（NHK BSプレミアム）などに出演。全国各地での講演活動も精力的に行っている。著書には『幕末維新まさかの深層』（さくら舎）、『坂本龍馬の正体』（講談社+a文庫）、『西郷隆盛100の言葉』（潮新書）などがある。監修者として『日本武術・武道大事典』（勉誠出版）。「コミック版日本の歴史」シリーズ既刊62巻（ポプラ社）などを手掛けている。

「慶応と明治」「江戸と東京」という二つの時代が混在した一年を描くことで明治維新の実相を伝えたい。